

# 関 信三の生地を訪う

## 「文明開化と幼稚園紹介」補遺

津 守 真

ことしの三月二十九日、久しい間、訪ねたいと思っていて果たさなかった、関信三の生地である三河国幡豆郡一色の安休寺を訪うことができた。

関信三は、お茶の水女子大学の前身である東京女子高等師範学校（創立当時、東京女子師範学校）の附属幼稚園が、明治九年に創立されたときの初代の園長（監事）である。もうすでに十年以上も以前のことになるが、日本保育学会の共同研究として日本の保育史の研究委員会が発足したとき、私もその一委員となり、関信三の奇しき経歴に興味を感じて調べるうちに、関信三について伝えられていることに誤りや誤解があることを発見し、その後、折にふれ、時にふれて資料を重ねてきたのである。

たぶん昭和三十二年の八月だと思ふ。夏の暑い日に、私は流れる汗を拭きながら、下谷の寺町に向かう白い道を歩いていた。「幼児の教育」の古いものに、当時の保姆練習科の卒業生の手記に、関信三が明治十二年に亡くなった折、卒業生の手で下谷の

お寺に墓石が建てられたという記事を見たので、そこにいけば関信三のもっと詳しいことが何かわかるだろうと思つたのである。しかも、その記事によれば、墓石はフレーベルの墓に擬して作られたということであつた。フレーベルの墓は、周知のように、第二恩物の立方体と円筒と球の形をくみ合わせて作られている。こんな珍しい形の墓石ならすぐにもつかるだろうという気持と、こんな形の墓石が日本にあるはずがなからうという疑念とが交錯していた。

さて、下谷にきてみて困ってしまったのである。下谷には寺が何十と建ち並んでいるのである。一つ一つ墓石を調べるのは容易ではない。徘徊した後、角の石屋で、東本願寺の寺とたずねたところ（関信三は東本願寺の僧籍の出身である）下谷に何十という寺院がある中で、東本願寺の寺はただ一つ、宗善寺があるだけだと道順を教えしてくれた。いくつか細い道を折れ曲がって目立たない場所にあるその寺は、戦災で本堂は焼けていて、仮の建物のようにあつた。

そして墓地がそのまわりをとりかこんでいた。その中に足をふみこんで、ぐるりとまわすと、たしかに、フレーベルのあの恩物形の墓石があったのである。それは、私にとっては大きな感激であった。石は少し黒く、形は少しくいびつであらけずりであったが、世界に二つしかないこの墓石に、幼児教育の重みを感じるような気がしたのである。

寺には過去帳が残っており、明治十二年十一月四日(没) 関信三、金剛寺坂上金富町四拾二番地とある。この金富町とは、今の文京区福祉会館のすぐ裏手に当たるところであるが、もちろん、いまは何も残っていない。



関信三の墓

ない。寺ではそれ以上詳しいことはわからなかったが、門のわきの墓守さんにたずねたところ、そのおもしろい形のお墓には、ときどき、中年のご婦人が花をあげにこられますとのこと、そんなことから、親切な墓守さんの手引きによって、関信三の孫であり、唯一の縁者にあたる方を知ることができ、これまでに調べた記事のところで、確認することができたのであった。

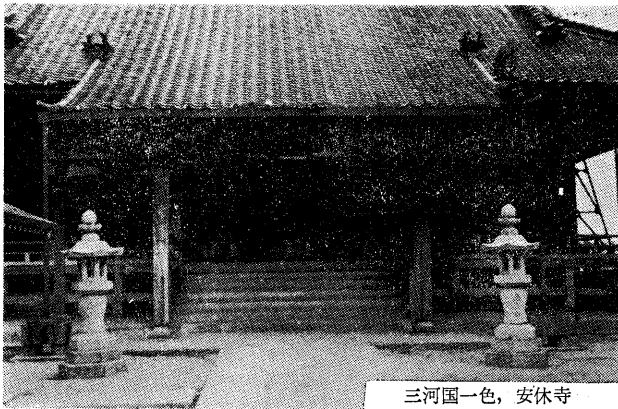
さて、その後、教育大学の森岡清美教授とたまたま話していたときに教えられて、石川県金沢の郊外松任の本誓寺から、関信三洋行の折の思いがけない記事を発見したり、時期は少しさかのぼるが横浜海岸教会で、わが国における明治初年の最初のキリスト教受洗者名簿を見て、それに除籍印の押しであるのを見ることができたり、北星学院教授加藤邦雄牧師より小沢三郎氏の「幕末明治耶蘇教史研究」を拝借したり新庄先生のお世話で、当時の女高師の絵の先生である武村千佐子(耕龔)女史

のご養子の方から、女史の日記をみせていただいたり、いろいろ新しい資料を見出したのであるけれども、それでもまだ、関信三の正確な生年月日もわからないままであったし、その他、重要なことがいくつも不明のままに、私は、保育学会の幼児保育史の関信三の項を書いていたのである。(それは、本誌、六十一巻二号57―71頁昭和三十七年「文明開化と幼稚園紹介の事情―幼稚園紹介」に記してある)

たまたま、昨年の暮れ、前に述べた関信三の遺族の方が、関信三の出身地である三河国安休寺を訪ねられ、その折に、土地の郷土史家である杉浦廉平氏より、関信三についての資料の写しをもらって来られた。それをみたところ、私が以前に知ることのできなかった記事がいくつも記載されていたのである。三河国一色という、鉄道の本線からはずれており、簡単にいかれないところのように思われたことと、どうせこれ以上新しい資料もあるまいと思っていた

ことで、一度は訪ねたいと思ひながらも、果たしていなかったのである。思えば、まず訪ねておいたらよかつた場所であつた。

その日は幸ひ天候に恵まれ、東海道線豊橋でのりかえ、新名古屋鉄道で知立ちりやうで降りた。ここは昔の東海道筋で、電車の乗り換え時間に、旧街道を昔の旅人が立ち寄つたように知立神社に向かつて歩いていくと江戸時代からの古い家が白く黄色くつづいた道が残っている。知立からさらに支線に乗り換え、今村で降りる。そこから三河一色までは、一時間に一本くらいしか出ないバスでいく。さえぎるものもないバス道が畠の中にまっすぐに通っている。表向きはモルタル塗りにしたり、看板がかけてあつて現代ふうだが、よくみると古い格子のはまったりつばなつくりの家が並んでいる町にはいると、そこが一色町である。町にさしかかつてにぎやかになつたところでバスを降りてたずねて、安休寺はすぐにわかつた。周囲はいずれも古い家並みである。



三河国一色，安休寺

寺の現住職、二十八世雲英きん元寿氏の話によると、この寺は、七百年前に、一色氏が管領のときに建てたものであるという。堂の前の石の燈籠には永徳三年の年号が刻んである。永徳三年というと、一三八三年にあたるから、今から五百八十年前のものである。現在の建物は二百年位以前に建てられ

たもので、江戸中期のものという。関信三は、僧猶龍ゆりゅうといつて、浄土真宗大谷派安休寺第二十二世雲英元了師の末子として生まれた。生年は天保十四年癸卯正月廿日である。これは一八四三年にあたる。亡くなつたのは明治十二年、一八七九年であるから、三十六歳という壮年期に亡くなつたことになる。関信三ののこした幼稚園記、幼稚園二十遊戯法などが、明治期を通して日本の幼稚園界に大きな影響力を持ったのであるが、それにしても関信三は若くて亡くなつたものであると思う。

郷土史家の松浦廉平氏は、ちょうど身体を悪くして大阪の病院に入院中で面会することができず残念であつたが、ここで、杉浦氏の記された「関信三伝」によつて、私が以前に記した関信三の伝記で明瞭でなかつたことを補つておきたい。

杉浦氏の記述によると、幼少時のことが詳しい。僧猶龍は幼名を理理丸りりまるといい、「母村上氏の胎内にあること十三ヶ月、人皆その奇異を驚歎せり」といふ。父元了師はその

前年の冬遷化し、母と長兄晃耀師によって成長せり。幼にして屢々人を驚かしむる行為があったと伝う。始め豊後国広瀬淡窓翁の塾に入って漢籍を学び、後に涸津土井翁の門に遊ぶ。この時すでに巖然頭角をあらわしたという」以上の記述は、私の調べたものには全くなかったもので、私とは全く異った資料源から得られたもののようにである。

その後、関信三は、耶蘇教の探索に従事することになるが、次の一節も私の資料にはなかった材料をふくんでいる。

「文久三癸亥年六月大谷派本願寺大学寮において擬寮司となり尋いで寮司に進んだ。明治之戊辰年本願寺より異教探偵の内命をうけ筑波国伯恵寺細門千蔵氏とともに長崎に潜行す。明治三年本願寺門主の家徒に登用せられ姓名を安藤劉太郎と改む。その後浅草本願寺納戸役松井某に事を謀り横浜に寓居米人ジョンバラ氏について欧学を修めた」

すなわち、この間に関信三は安藤劉太郎

という名で、はじめ長崎で、次に横浜でキリスト教宣教師の中に入出しこの内情をさぐり、横浜海岸教会で、謀者の目的を達するために受洗することになる。この間の事情は、五十四通におよぶ謀者報告に詳しく記されている。

こんなわけで、関信三のことは、後に明治のキリスト教の指導者である植村正久によって、手きびしく批判をうけるのであるが、今、これらの資料をそろえてみると、植村正久には誤解があったように思う。関信三自身も、日本の伝統的風土に育った仏門の出であったということ、明治初年に謀者とはいえ、新しくふれた西欧の世界との間に相剋を感じていたのではなかったろうかと思うのである。彼の謀者報告は、詳細な客観的事実の記載である。それは学問的研究を思わせる細心さであり、主観的評価や断定的表現はほとんど全く用いられていない。

明治五年、関信三は東本願寺現如上人に随行して欧州にわたる。松本白華、石川倫

弘、成島柳北が同行する。

この洋行途上の記事が、私が前述した金沢、松任の本誓寺にのこる松本白華文庫の中の松本白華の日記である。ところが、このたびの杉浦氏による記事は、これと異なる内容をもちながら客観的事実は一致しているのは不思議である。杉浦氏の資料によると出航後の旅程は次のようである。

「明治五年九月」十三日仏国飛脚船にて横浜を解纜し途中印度セイロン島に仏陀の遺跡教法の事情を探り風土人情を視察し同年十一月二日パリに着き爾來勝境遊觀事情搜索殆んど三十余日を費し、明治六年一月八日一行と別れて独歩英国ロンドンに到り」と記されている。

松本白華の日記はより詳細なのであるが、これに見合う部分を抜きがきすると次のようである。

「九月十三日晴、……乗仏国郵船具太米利馬力」この九月十三日というのは陰曆であったことがわかる。その後、シンガポー

ル、香港を経てパリに行つたことが記された後、「五日金曜日晴、充吐露所志余欲就仏学 関欲在倫敦講義英学」と記されている。

すなわち、それぞれ、これからこの国で学ぶかを話し合い、松本白華はフランスで学ぶことを欲し、関信三はロンドンにいき、英学を学ぶことを欲している。次いで、

「八日、関將海倫敦余送行墨人送至ステーション○默雷米β相共乗馬車到大使館」とある。すなわち、関はロンドンに発ち、松本は駅まで送っていく。この八日というのは、明治六年一月八日のことで、前の記事と月日まで全く一致している。

さて、松本白華の日記に関信三が登場するのはここが最後である。その後は関信三帰朝後の動静しか分かっていなかったのであるが、杉浦氏の記事は、さらに英国における関信三の足跡を伝えるのである。そのつづきを次に引用しよう。

「明治六年一月八日一行と別れて独歩英国ロンドンに到り、尋いでレッソング(距ロンドン四十英里の小都会人口三、四万)にて

ミス・ヨナリー・カレッジ(プロテスタント宗教師に任ずべき普通学を卒業した老書生の入学する学校)に入学してブレン氏について専ら文学を学び傍ら教法の事情を探り、同年四月プロッケレーに転任して教師を撰び就いて学ぶ。同七年八月ロンドンに帰り同十一月英国を去つて八年一月四日帰朝」

すなわち、英国における関信三はプロテスタントの神学校に学んでいたことになる。この間、日本においては、明治六年二月には、切支丹禁制高札は撤廃され、同年十月には耶蘇教課者は解任されており、関信三自身は生涯の目標は改変をせまられていたのである。このような社会情勢の下にあって、彼を神学校まで赴かせたものは何であつたのか。それはもはや課者としての役割というような単純なものではなかつたであろう。長崎、横浜で接した宣教師を通じて、西欧の人間性にふれ、単純に排斥しきれないものを感じていたにちがいないと私は思うのである。その新しい世界は、現代の私共の思うよりもっと驚異的な未知の世界であつたに違いないし、しかもその中に、人間としての共感をよぶ多くのものを感じとっていたにちがいないと私は思うのである。

そして、彼が幼児教育の先覚者として、フレーベル教育学を日本に導入したほどんご最初の日本人であることを思い合わせるべき、彼の生い育つた風土と新しく開けた世界との距離にあらためて気がつくのである。幼稚園の創始者であるフレーベルの教育学の基礎をなすものは、キリスト教的理解にもとづくところの児童観である。関信三自身は、フレーベルを紹介して、その教育哲学の部分を省略しているのであるが彼自身フレーベルの主著である「人の教育」をよんでいなかったとは考えられないし、フレーベルの教育哲学の理解なしにフレーベル紹介をしたとは思えない。しかもそれを敢て語らないところに、明治初年に生を受けた日本人の精神的葛藤をみるような気がするのである。

三河国一色のその寺は、関信三が生い育

安休寺、鐘楼

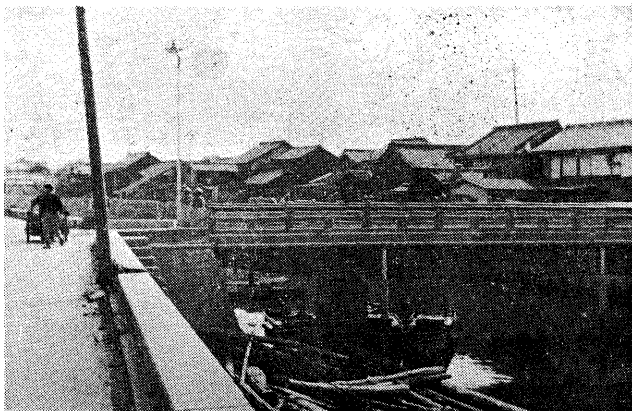


ったそのままの姿で今も建っている。その門前の家々の格子も、土塀も、明治の初年の姿をのこしている。東京都とは違っておそらく百年の間にくらも変貌してない町であろう。橋をわたり、川べりを海の方へと、その古い家並のつづく道を歩き、石の観音の立ち並ぶ寺々をみながら、今も



なお生きている日本の風土を、都会から突然にやってきた私はことさらに感じたのである。

帰朝後の関信三は、幼児教育者、婦人教育者として活動する。杉浦氏の記事によると次のようである。



「八年一月四日帰朝、東京に居住、訳述の余暇生徒を悟す、同年九月東京開成学校助教員に任ぜられ尋で東京英語学校兼勤務秘書仰付九年二月東京開成学校を辞し東京女子師範学校教員に任ぜられる。九年七月『幼稚園記』を訳編して世に公にした。御書永らく東京女子師範学校蔵版となる。……明



治十一年四月田中不二齋文部大輔の内命に依り『幼稚園創立法』を編纂して文部省に提出した（この創立法は皇子建宮殿下追々御成長につき窃に宮内省に於いて幼稚園御設立の企があったに因るとうけたまわる）

同年五月稟申書を中村撰理に呈して保母練習科を幼稚園内に開設すべき必要を論じ同

年九月同科の開設を文部省より裁允せられたこれ全く稟申書に基づくところといわる。同年十二月先生編の『幼稚園創立法』を文部省教育雑誌に刊行 明治十二年九月

『幼稚園二十遊嬉』を訳編した。先生教育に尽すこと前後五年間時に大になすあらんとす。明治十二年十一月四日遂に妻しらず長女せい次女ふみを遺して病死せらる」

武村千佐子（耕靄）女史の日記には次のように記されている。

十一月五日 永井幹事内務省へ転任之事

同日 関幼稚園監事病死ス

同日 関氏葬式教員生徒六十名程

同日 見送ル

同日 同氏ノ法事ニ招カル事

同日 同氏ノ法事ニ招カル事

杉浦氏の資料と私の資料とはこまかいところは異なりながら、客観的事実は一致しているのである。

明治十二年という時、現代に生きる人にとってははるか遠い昔のことのように思え

る。しかし、この幼稚園の先覚者の感じた葛藤やその中であつて幼児教育に感じた魅力は、現代の私どもにもそのままにあてはまるものである。

今や、幼児教育には、いろいろの方角から風が吹き寄せている。この時に、幼児教育の中心となる課題は幼児自身であり、いかにして幼児の人間の成長に役立つかということであることを考えてみなければならぬと思ふ。明治維新の日本に生きた関信三は、その古い日本の土壌に足をおろしながら、フレールベルの説いた「幼児にふれる心」を感じとることができた。人間の真実心」にふれる心は、どの時代にも幼児教育の根本に流れるものであり、古くもなく新しくもないものであろう。いろいろの方角から風の吹き寄せる現代にあつても、幼児教育の根本を見失ってはならないし、また、幼児がいるかぎり、おとなは幼児によって、人間らしさを教えられるのであろう。三河湾の海風に吹かれながら、私は百年の歳月が一瞬に縮まるのを覚えたのである。